



## 老いの人生

柴生田 晴四  
(経済倶楽部理事長)

▼昨年発売され、今年上半年期のベストセラー第一位に輝いた佐藤愛子の「九十歳。何がめでたい」は、とってつけたように敬老の日などを催してお茶を濁す日本の社会の偽善を見事に一喝し鉄槌を下しました。もちろん、「そうは言っても」という言い分は幾らもあるでしょう。しかし、何かという他人の尻馬に乗るくせに、肝心の時に押し黙ってしまう今の風潮をよそに、自らの存念を明快に述べ

る姿勢が多くの共感を博たのでしよう。

▼タイトルの通りで、齢を重ねるということは、次々に襲ってくる心身の「故障」や「衰え」に否応なく向き合うことです。しかし、単なる愚痴ではなく現代の「社会」、「時代」、「世相」に存在する様々な問題への見解が納得のいくものであれば、だれもが耳を傾けます。この本の場合は、激しさの底に流れている、温かい眼差しが感じ取れるからこそ、多くの人の共感を呼んだのです。

▼「老い」をどう生きるのか考えて思い出したのが、沢村貞子の晩年のエッセイです。名脇役として知られた沢村は名エッセイストでもありました。「貝のうた」、「私の浅草」が評判になり、いくつも雑誌の連載を頼まれる

ようになりました。1989年に80歳を越えたのを機に女優を引退し、やはり執筆活動をやめていた夫大橋恭彦とともに湘南に隠棲、その後は執筆活動に励みました。この時期に書かれたのが、「老いの楽しみ」、「老いの道づれ」、「老いの語らい」です。

▼「老いの道づれ」には、「二人で歩いた五十年」という副題が添えられています。94年に83歳で亡くなった夫と出会ってからの50年の歩みを二人で書こうと約束したのですが、夫は最初の部分を書いただけで逝ってしまいました。序章である「逝ってしまったあなた」に、その辺りの事情が綴られています。

▼沢村は、日本女子大学在学中に新築地劇団に入団して左翼演劇活動に身を投じ、二回に

わたって特高に逮捕されて、治安維持法違反で有罪判決を受けます。終戦直後には、兄沢村国太郎の一座に身を寄せており、京都南座に出演していた折に、都新聞の記者だった大橋と出会い、交際を始めますが、二人にはそれぞれ家族がいました。やがて二人は駆け落ち同然に上京し、実質的な夫婦生活をスタートさせます。出会いから五十年、二人を結びつけ続けてきたのは、「語らい」を大切にす

る生活でした。

▼「老いの道づれ」は、飾り棚に安置された亡き夫の遺影と骨壺との静かな「語らい」によって書かれました。刊行の翌年、87歳の生涯を閉じた沢村の遺骨は生前の夫との約束通り、夫の遺骨と共に相模湾に散骨されました。